

平成22年度 学校評価書

学校名	兵庫教育大学附属中学校
-----	-------------

1 学校教育目標

<p>人生をたくましく豊かに生き抜くために、考え、鍛え、行動する人間の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生命を大切にし、自他の人格を尊重し合う生徒 ○ ものごとを真剣に考え、進んで行動する生徒 ○ 心身を鍛え、強い意志と体力をもつ生徒 ○ 豊かに感じる心を持ち、表現できる生徒 ○ たがいに信頼し、共に助け合い磨き合う生徒 ○ 社会に積極的に、奉仕する生徒

2 本年度の重点目標

<p>(1) 学習指導について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生きる力を育むことを目指し、「確かな学力」の定着を図るため、学習指導方法や学習形態などを工夫する。 ・平成24年度の新学習指導要領完全実施に向けた、教育課程の移行を鋭意進める。 ・情報リテラシーの育成をめざすとともに、情報モラル教育を推進する。 ・図書館の充実と読書指導の充実を図る。 <p>(2) 生徒指導について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒指導体制を確立する。(生徒指導部会を定期的におこない、統一した生徒指導・生活指導ができるようにする。) ・教師と生徒の信頼関係を深め、生徒間相互の望ましい人間関係の構築を図る。 ・特別支援教育(特別支援体制の整備、教育相談、不登校生徒への取組など)の充実を図る。 <p>(3) 学年・学級経営等について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学年経営の基本方針を明らかにし、各教員の力を結集して学年経営の充実を図る。 ・学年主任、副担任の学級への支援体制を確立し、学級経営を充実させる。 ・保護者との連携を強化し、学級・学年懇談会等とおして「学びの共同体」の実現を目指す。 <p>(4) 教育研究について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究体制を確立し、全教員が研究授業を実施するとともに職員研究会の充実を図る。 ・教育研究の成果を発表する。(研究発表会の開催) ・大学及び地域の公立学校との連携を図り、研究交流を一層推進する。 	<p>(5) 実地教育について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実地教育について共通理解し、計画的な実習が行えるよう指導を工夫する。 ・実地教育のあり方について検討する。 ・大学授業の充実を図る。 <p>(6) 道徳教育について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人権意識を高める道徳教育を推進する。 ・「道徳の時間」を要とした学習カリキュラムを作成し、計画的に学習を実施する。 ・人間としてよりよく生きるための基本的な心構えや行動の仕方について学ばせる。(命の尊さ・自尊感情・思いやりの心・逆境に負けない強い心の育成) <p>(7) 特別活動について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・望ましい集団活動をとおして、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図る。 ・生徒が主体的に取り組めるようにする。(生徒会活動の活性化) ・生徒の主体性を生かした行事を計画する。(学校行事の精選をし、行事の企画運営のマンネリ化を回避し、行事内容の充実を図る。) <p>(8) その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員としての使命感と高い倫理観を持ちながら、豊かな人間性の涵養に努め、専門性と実践的指導力の向上を目指し、研究と修養に努める。 ・説明責任・報告を随時行ない、学校評価(自己点検、自己評価、学校関係者評価)をおこなう。
--	--

3 自己評価結果(達成状況)【A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない】

分野・領域	評価項目(取組内容)	取組達成の状況	評価	改善の方策
教育活動	「確かな学力」の定着 生徒の実態を的確に把握し、個別指導やグループ指導、繰り返し指導などを充実させて、基礎的基本的な学力の確かな定着を図る。	学習習慣、学習態度、学習意欲など、よくなっている。授業では、教えてから考えさせるようにし、学んだことを活用する機会を設けた。課題と点検を繰り返しおこない、個々の学力の定着を図った。	B	個別学習とグループ学習を組み合わせ、人との関わり合いの中で学力の定着を図る。また、復習をとりいれ、繰り返し学習させることをとおして、基礎的な学力の定着を図る。 教材を複数用意し、個々の生徒の学力にあったものを選択して取り組めるようにする。
	「思考力・判断力」の育成 コミュニケーションによる思考を育む授業をおこない、学び合い、高め合う授業作りに努める。	「学び合い」学習が定着し、自分の考えを伝えることができるようになってきた。 話し合いから対話になるように課題設定のあり方を検討するとともに、対話の質が高まるように生徒に働きかけをおこなった。 思考力を高めるところについては、十分にできていないこともある。	B	学習課題の魅力や妥当性を吟味し、生徒が意欲的に取り組めるようにしたい。 思考を高めるための課題提示の工夫やグループ学習の場の設定などを検討し、「学び合い」がどのような過程を経て、「高め合い」につながっているのか分析的に見ていく。

4 分野・領域ごとの学校関係者評価

<p>学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価</p>
<p>全体的に評価項目において、「B:概ね達成している」となっているのは、学校が計画どおり教育活動を行えているということで評価できる。 「学び合い」を高めるためには、教師と生徒、生徒同士の日常のコミュニケーションが大切である。コミュニケーション力を高める工夫がされている。 改善点としては、A~Dの評価では詳細がわかりづらいので、概ねとは何%なのかわかるようにした方がよい。 評価委員の話し合いに学校側も参加した方が、より質の高い評価ができるのではないかと。</p>

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
教育活動	道徳教育 生徒の実態をふまえ、適切な主題設定をおこない、より価値を深める学習を実践していく。	生徒につけさせたい力、つけるべき力を考え教材を選び、授業をおこなった。 全体的にはあいさつや基本的な生活習慣、人間関係など道徳的な意識は高くなっている。道徳や教科の学習が生徒の実生活につながるような取組にする必要がある。	B	生徒個々の道徳的実践力につながるような、生徒の実態に合った、心に届く教材や資料を集めたい。道徳で学習したことが学校生活に反映されるようにする。 道徳の教材、内容など3年間の一貫したカリキュラム作成が必要である。 学習の前後での価値観の変化を認知できるような工夫をしていく
	人権教育 人権意識を高める授業を展開し、人権感覚の備わった生徒の育成に努める。	人権作文発表会、学年集会、行事などとおして人権意識を高める工夫をおこなった。 認識は高まったが、人間関係のトラブルなど十分でないところがある。 公民的分野で基本的人権に関する事例と法的内容、人権の分類をおこない、基礎的・基本的内容を充実させた。	B	自分の問題としてとらえる、相手の立場から考えるなど、実生活の中に反映できる取組をする。人間関係をよりよくする道徳的な教科の授業を展開したい。人権意識を高める課題の設定や展開の工夫などとおして、人権感覚の育成のできる取組が必要である。
	特別活動・学校行事 生徒会を中心に生徒一人一人が主体的に取り組めるよう計画し、自主的・実践的な態度を育てるとともに、学級、学年、縦割りグループ、全校などの様々な集団を構成する中で、目標に向かって努力し達成する喜びを味わわせる。	体育祭や友誼祭など学校行事を中心に、生徒が主体的・自主的に活動できた。ただ、毎日の生活の中では実践的な態度が不足している。 意欲的に取り組み、子どもらしい素直な発想で、行事を組み立て、参加することができた。	B	行事の到達目標とその評価が不十分で、それらが集団作りによどのよう影響しているのかを分析する必要がある。そのための特別活動と道徳の連携したカリキュラムを作る。また、授業時間確保の点から、行事の練習時間を減らし、効率的な取組をおこなう。 各行事では、リーダー以外の生徒の活躍の場を意図的につくり、行事に対する意識や責任感を高める工夫をする。
	情報教育 教育機器をうまく活用しながら、教育効果を上げるような努力をしていくとともに、情報社会に適正に参画する態度（ルール、マナー）を身につけさせる。	デジタルコンテンツを活用した授業など、教科によっては教育機器を活用し、教育効果を上げるような工夫をしている。 情報モラルの育成については計画的に指導する必要がある。 本年度には、ICT教育機器の整備が完了する予定で、来年度の活用に向けて準備中である。	B	インターネットや携帯電話など情報機器を用いた情報の取捨選択についての指導をおこなう。生徒の情報モラルの育成をカリキュラムに入れ、計画的に指導する。 教員の情報リテラシーを高める研修をおこなうなど、ICT教育機器の有効な活用と授業での効果の分析をする。
学校運営	学校組織運営 学校長のリーダーシップのもとに、全教育活動にわたって円滑に、創造的に実施できるよう、能動的な組織体制をめざす。	学年組織と学校組織の連携ができており、職員の合意のもとに学校運営ができています。 各行事の実行委員会と各会議を効率的にリンクさせ、意思疎通や共通理解を深める必要がある。	B	学校目標や課題解決のため、共通理解、意思疎通を図り、協働して目標の達成に向けて努力する。スムーズな情報の伝達等が進められるような組織体制の構築をめざすとともに、事前事後の打ち合わせの徹底を図る。 男女の構成など、職員の配置を見直しバランスのとれた学年組織を構成する。
	学年経営 学年経営の基本方針を明確にし、各教師の力を結集しながら、望ましい生徒集団の育成を図る。	学年主任を中心に教師の協力体制ができています。生徒一人ひとりをよく把握し、学年で協力して、集団の育成ができています。 クラス独自の雰囲気や尊重しながら、学年目標を目指して、各クラスが協力して活動することができた。	B	学年目標を生徒に周知し生徒の学年意識の向上を図るとともに、生徒のリーダーを育成する。 どのような生徒集団を目指すのか、学年の教師の共通理解を図り、協力して生徒の育成に努めるとともに問題解決にあたる。
	学級経営 生徒が前向きに学習に取り組める学習環境の充実を図る。 生徒の望ましい人間関係を育む規律ある学級づくりと個々の生徒に応じた指導をおこなう。	生徒一人ひとりに応じた支援や指導など、細かな配慮をした学級経営がなされている。不登校傾向の生徒も継続して登校できるようになった。 教室掲示は学習意欲や学級の仲間意識が高まるように工夫した。	A	学級の学習環境や掲示物に意識を向けさせ、「自分たちの学級は自分たちがきれいにしたい」という気持ちをもたせるなど、日常生活のモラルを集団のなかで育むことができるように働きかける。一つのことには時間をかけて取り組ませたり、継続して取り組んでいけるような仕組みをつくる。
	保護者との連携 担任の先生を窓口、保護者との連携を深め、学級及び学校への教育的支援体制を作り上げていく。	担任だけでなく学年団で生徒を見守っていることを保護者に理解してもらうように努力した。また、学年通信を発行し、行事や総合学習での生徒たちの様子を知らせている。 保護者からは学級懇談会などで意見をいただき、連携を図っている。	A	保護者や生徒への細やかな対応に心がけるとともに、学校の教育スタンスを明確に示し、さらなる連携を築いていきたい。 3学期に授業参観や学年のまとめをおこなう学年懇談会などがなかったため、欠席連絡や問題対応など機会を捉えて、学校と保護者とのパイプを深めたい。

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>異年齢の生徒の関わりを増やすことが、道徳、人権教育を高める場となる。学校行事など、生徒を中心として学年を越えた取組は評価できる。また、人権作文発表会は、大変素晴らしい内容であった。</p> <p>附属中の場合は、トライやる・ウィークを実施しない代わりに、職業体験学習や地域の職場見学をおこなっているが、附属の生徒にもトライやる・ウィークと同じ体験をさせたい。地域へ生徒が出て行くことで、地域の方に附属中のことを理解してもらえる機会となるのではないかと。</p> <p>保護者や地域の力を教育活動に活かしていくような取組をすれば教育的な効果があると思われるのでこれから検討してはどうか。</p> <p>情報教育など、生徒が習得した知識を地域の人に教えるなど、双方向のコミュニケーションができれば、生徒の自信になるのではないかと。</p>
<p>学年運営も学級運営同様によくできているのではないかと。生徒同士のつながりができており、学級経営がうまく機能している。</p> <p>保護者との連携では、教師は保護者とともに子育てをするという意識をもって、時には保護者に教えるということも必要になる。</p> <p>附属中学校は創立以来30年近くが経過しているが、公立の学校に比べ地域とのつながりが少ないようだ。生徒が地域へとけ込むような活動を取り入れたら、附属中学校の活動を地域の人々に理解してもらったりするようなPRが必要である。</p> <p>地域には学校へ協力することができる人材や事業所があるので、教育活動に積極的に活用することも考えてはどうか。</p> <p>PTAとの連携については、PTA運営委員会や学校行事で協力関係ができています。また、本年度おやじの会を発足させて新しい活動に取り組んでいるなど評価できる。</p>

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
学校運営	生徒指導（規範意識・態度） 学校や社会でのルールやマナーについて学習を進め、望ましい学校生活や社会生活のあり方を考えさせる。また、行動に反映できるよう機会を捉えて働きかける。	全校集会や学年終わりの会において定期的に注意を喚起している。職員会議などで教員の共通理解を図り、全教職員が指導できる環境を整えている。 登校指導、下校指導をおこない、通学時におけるマナーの改善にあたってきた。しかし、十分に徹底できていないところがあった。	B	生活指導、登校指導などとおして、意識づけはできているが、生徒自身の行動には十分に反映されていない。全体的にはよいが、個別に見ると不十分なところがあり、生徒一人ひとりに注意を促す。 規範意識を高め、社会人としての常識や振る舞いを身につけさせていきたい。
	生徒指導（内面的理解・共感） 一人一人の生徒の内面を共感的に理解し、人間的ふれ合いに基づいた指導を継続しながら、信頼関係を深め、生徒間相互の望ましい人間関係の構築に努める。	一人ひとりを大切に接するように心がけている。時間をかけて接するほど、生徒理解が深まってきている。問題への対処をおとして、教師と生徒の信頼関係が深まっている。 登校に不安があった生徒も教師への信頼や生徒同士でのつながりもうまれ、安心して登校できるように変わってきた。	B	学習設計から生徒の様子を知ったり、出来るだけ一人ひとりと話す機会を設けたりすることで、より深い理解を目指す。 「学び合い」の授業や行事をおとしての円滑な人間関係を深め、相互に向上させていきたい。 トラブルの原因とならないよう生徒相互の人間関係に配慮しつつ、指導を進めていく。
	実地教育（教育実習） 学校教育センターや大学の先生方と密に連携を図りながら、実習生への指導を充実させ、教科特有の指導法や本校での教育研究とも関連した指導などを伝授する中で、教師になる素養を高めていく。	本年度は、大学の多くの先生方に授業研究に参加していただき、連携して指導することができた。教育実習では、連携のための組織が確立されており、細やかな教科指導ができている。 教科間での大学との連携では、不十分なところもあるので改善が必要である。	B	教科指導の部分で大学との連携深めることが必要である。各教科での連携組織を作ることが必要である。 学生の素養を高めるために、ごく基本的なところを大学で勉強してきてほしい。 短い実習期間の中で効率的な指導をおこなうため、事前指導と事後指導の質を高め、整合性を図る。
	大学・附属学校園間の連携 附属学校運営委員会での方向性をもとに、大学及び附属学校園間の連携を深め、効果的な教育活動をめざす。	三附属学校園連携推進委員会を学期に1回開催し、幼・小・中と大学の連携について話し合う機会をもっている。また、各教科では必要に応じて教科部会をもった。 英語科では、教員が小学校に出向いて、小学校ALTとHRTと合同で授業をおこなった。 子ども理解委員会では、小・中合同アンケートを実施し、効果的な教育活動のための情報収集に努めた。	B	共同研究や実地教育、教科研究部会を通じた連携、附属学校園間の取組があるが、一部の教科にとどまっている。全ての教科で大学や附属学校園との連携を深めるため、実地教育でなされているような組織作りが必要がある。 定期的に意見交流を行える機会を設けて意見交流を図っていきたい。附属学校園との連携は授業を参観し合うことから始めている。
研究活動	研究体制の確立 研究体制を確立し、多くの研究授業を実施する中で、職員研究会の充実を図っていく。	研究部会で研究の方向性と内容を決定し、職員研究会で提案をおこない、内容を深めた。 研究発表までに授業公開をして、授業内容を検討した上で、研究発表会の授業が行えた。 また、他教科の授業を見ることで、参考になる部分が見えてきた。 研究発表会後の研究が進んでいないので、本年度のまとめをすることが必要である。	B	本年度の研究内容の決定がおくれ、教科に共通した研究内容について議論を深めることが十分にできなかった。来年度の研究テーマや内容を早く決定し、十分な議論をして内容を深めたい。 本年度の「学び合い」のよさを継続するとともに、一斉指導のよさもふまえた柔軟な学習形態を考えて研究に取り組みたい。
	研究発表 研究発表会を開催し、教育研究の成果を公開発表する。 本校の研究内容について、大学や公立学校等の研究者から指導、助言を受け、研究を深める。	これまでの4年間の研究の取組を公開発表した。他附属学校、公立学校からの参加者と研究内容や授業について協議をおこない、相互に得るものがあった。「学び合い」以外に、各教科で共通した細かな研究内容が必要であった。参加者に具体的な内容の提案ができるように、理論と実践のつながりを明確にしておいたほうがよい。	B	他の附属学校の先生方が参観に来られて、十分納得して帰られるような研究の理論が必要である。また、理論と実践のバランスがうまく取れなかったので、理論に沿った実践を蓄積し、その過程と結果が発表できるようにしたい。そのためには全体での研究会と教科での研究会を定期的に開催し、研究の方向性と内容を共通理解し、議論を深めることが必要。
	指導力の向上 大学の先生方との連携を密にしながら、教師として指導力の向上に努め、全教育活動において一層の充実をめざす。	研究指定、公開授業や研究会などをおして、大学や教育委員会、公立学校の先生方から指導を受け、授業改善に取り組んでいる。 また、学校内での公開授業や研究協議をおこない、研究テーマに沿った授業になっているか、生徒の実態に応じたものとなっているかなどについて検討をおこなった。	B	大学との連携は、教科により取組に差が見られるので全教科で大学と連携しながら指導力の向上を図りたい。また、年間をおして定期的に会議をもち協働して授業改善に当たれるようにする。 学校内での授業公開や研究協議を活発におこない、同じ教科内、及び、他の教科も含めた指導力向上に努める。

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>一人ひとりの生徒理解のための取組ができているのはよい。</p> <p>生徒指導では、教員がいかに現代のこども文化を理解するかが重要である。そのことが生徒の問題行動の予防や早期発見につながる。新しい情報を得る研修の充実を望む。</p> <p>生徒指導に関わる問題では、警察、市の子育て支援課、民生児童委員など、地域の関係機関とよく連携して、対応するのがよい。</p> <p>大学・附属学校園の連携では、附属ならではの良さを活かせるのでのよい活動である。</p>
<p>大学と連携してよく研修をおこない、教員の資質向上に努めていると感じる。毎年研究テーマに沿った研究が行われ、研究発表をしていることは評価できる。</p> <p>研究活動や研究内容については、学校関係者評価委員の立場からは意見を述べにくい。</p>

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
安全管理等	健康・安全教育 絶えず自分の健康に意識を持たせ、保護者や学校医とも連携を図りつつ、健康教育を推進しながら、食生活の基本を身につけ、自ら健康管理に生かす生徒を育成していく。	本年度は学校医による全校生徒を対象にした健康教室を実施し、喫煙と薬物への注意を喚起した。3年生には心肺蘇生法とAEDについての講習をおこなった。4月には配慮を要する生徒について、保護者や主治医とも連携を図り、教職員にも共通理解を図った。保健便りを発行し、病気の予防や対応について理解を深めた。	B	保健便り、給食便りなどをおして健康にかかわる内容の指導をおこなっていく必要がある。 個々の健康や安全面への意識はまだ不十分で、落ち着きがないため不注意でケガをする生徒がいるため、さらに注意を喚起していきたい。 登下校など交通安全に関する生徒の意識が十分ではなく、行動面に反映できるようにするよう指導する。
	防災教育 附属学校園における安全確保及び安全管理の手引きに基づいた訓練や学習を実施し、常に防災意識を高めておく。	1学期に「火災発生」「不審者侵入」の2回の防災訓練を実施した。また、2学期には教職員を対象にした、防犯訓練をおこない、警察官から直接指導をいただいた。	B	総合学習で生徒の防災・防犯の意識を向上する取組、震災についての学習を実施するなど、授業の中に組み込んでいくことを検討する。 訓練以外の場面でも防災や安全について意識化させる工夫が必要である。 地震を想定した訓練を検討する。
	施設・設備 施設・設備の定期点検と拡充をおこない、教育環境を整備することから、教育効果をより高めていけるように努める。	本年度、各教室にネットワークとプロジェクタが設置され、先進的な教育ができる環境が整った。また、家庭科室の給湯器、生徒玄関の掲示板など、設備の改善が少しずつできている。 安全面での点検は大学の事務と連携して定期的の実施しており、改善が必要なところは優先的に改善をおこなっている。	B	本年度に導入されたネットワークとプロジェクタを活用した授業の方法について実践的な研究をおこなう。また、授業に必要な細かな教材や機器を整備し、学習環境を整える。 野球のバックネットなど、多額の予算が必要なものについても、予算要求につとめ改善をめざす。

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>健康・安全教育では、学校医による健康教室や地域のボランティアによる心肺蘇生講習は大変よい取組である。</p> <p>防災教育では、警察の方にも協力をもとめるなど、社会の教育力を活用した取組を進めてほしい。</p> <p>健康教育では、掲示板をうまく活用して健康・安全に関する情報を常に生徒へ提供できるよう工夫できている。</p>